

## 認知症の人も家族も援助職も 対等。互いの不安、経験、知恵を 分かち合い、社会に開くDカフェ。



**竹内弘道さん**  
NPO法人「Dカフェまちつく  
りネットワーク」代表理事、目  
黒認知症家族会「たけのこ」世話  
人。30代から始めたボランティア  
は演奏会を開くほどの実力派。



デイサービス「ニコス」の休日を利用した「Dカフェニコ  
ス」。本人も家族も援助職も一緒にクリスマスを楽しんだ。



Dカフェが年2回発行する介護者  
でつくる認知症情報誌『ていめんし  
あ』には、すぐに役立つ情報満載。  
目黒区内で必要な人に手渡して。



おしゃべりしながらの手仕事が好きで、  
佐藤さんの母大瀧俊子さん94歳の笑顔。

### 5

月のある土曜、認知症の母を在宅介護中の佐藤悦子さんは、認知症の人と家族などが集まる『Dカフェ・ラミヨ』（東京都目黒区）の会に少し早めにやってきました。数日後、カフェ主催の旅行に母娘で参加するため、不安な点などをカフェの主宰者・竹内弘道さんと打ち合わせするため、車椅子のままOK？トイレは？お風呂は？……。認知症の母を在宅介護した「先輩」であり、今は認知症にかかわるすべての人の支援活動に取り組む竹内さんのアドバイスは細やかで共感的。佐藤さんも「あとは当日を待つだけ」と

ほっとした表情をみせた。認知症の高齢者にとつては不安の尽きない遠出。それでも佐藤さんが参加を決めたのは、「今食べたいものも思い出せない母がカフェの仲間から『旅行に行こうって』とうれしそうに話してくれて。私が引っ込んでいちゃダメだ、と」。発症から長い紆余曲折があった。「母に少しでも長く笑っていてほしい。それが今、いちばんの望み」ところで、一般にカフェといえど、喫茶店を指すけれど、冒頭でふれたように認知症の本人、家族、専門職、地域住人などが集まり、体験や情報の分かち合い、相談会

さまざまなお楽しみなどをする場を認知症カフェと呼ぶ。そこに3つのD（「ディメンシア（認知症）、誰もが自分のこととして、ディストリクト（町）」の意味を込めた『Dカフェ』を、竹内さんが立ち上げたのは2012年、夏。12年間在宅介護した、アルツハイマーだった母、伊代さんを自宅で見送った1年後のことだ。「穏やかな老衰死でした。前日までデイサービスに通い、食べ、翌朝、きもちよさそうに眠ったまま」「息子一人っ子」介護者だった自身が12年間、在宅介護を続けられ、母もまた多くの人に愛されて幸せな晩年を生きられたのは、同じ病気の人や家族、地域の援助職や行政などさまざまなつながりに支えられたから、との思いがある。「この家を、認知症や介護にかかわる人が集う場に使ってもらおうと（生前の）母と決めていました」

**D** カフェの特徴は認知症の本人も家族も援助職も対等な一人ひとりとして集えること。「病気の人を助けてあげようとか、家族だけで辛さを分かち合おうとか、知識のある人が教えてあげよう、ではない。そういう場はそういう場として別にあります。ここは、認知症の人が必要とする部分にだけ手を貸しつつ、ともに楽しむ場。援助職が「ご利用者様」ではない本人や家族と意見や気持ち

を交換し、認知症という経験を社会に開いていく場でもあります」だから参加費は、認知症の人も医師も竹内さんも一律300円で講演者への謝礼や茶菓子代などにあてる。冒頭に紹介した集まりでは、認知症専門医のトークを軸に家族、援助職などがそれぞれの心配事や経験などを分かち合った。

Dカフェは現在、竹内さん宅を含め施設や病院内などに4カ所。来年中に8カ所になる予定。認知症という、誰もが人ごとではない病気をキーワードに、立場や役割を超えて地域の人が緩やかにつながれる場が少しずつ育っている。



右・竹内さんの自宅(2階のオープンスペース)での認知症専門医を囲むミニ講演。さまざまな人が気軽に意見交換し合った。左・竹内さん宅の門には地域の人が集まる場を示す表札が。http://d-cafe.kazekusa.jp/